R&V

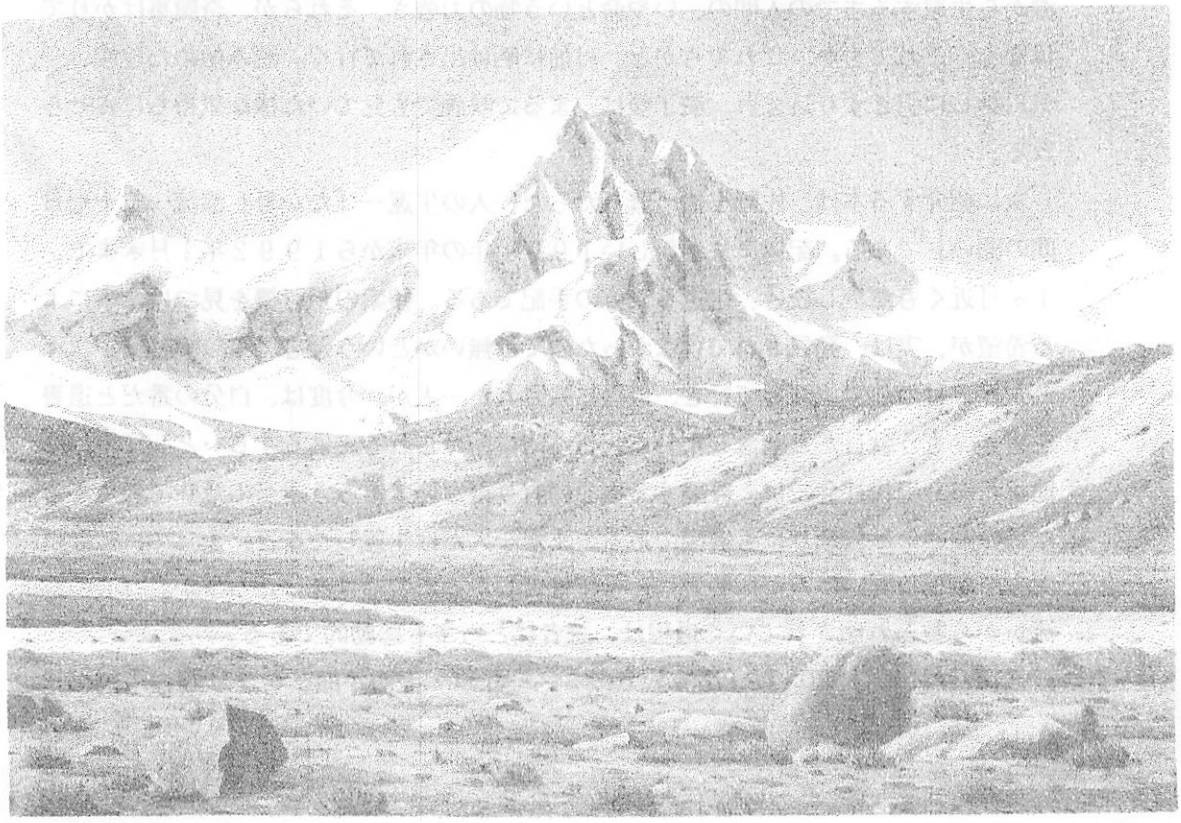
11号

1993年

秋号10月～12月

SHISHA PANGMA

by JUNICHI MAKI



『生還』…生と死の狭間で…

１９９４年、２月中旬の連休明けは、日本各地で、起こった遭難のニュースが溢れていた。そしてまた先日起きた剣岳での遭難。人里から離れた山や海で起こる遭難に、人々は自然の猛威に対して人間が、いかに非力であるかを感じ、またその事件の背後に覗く様々なドラマに深く心を動かされたであろう。

そのような生と死の間をさ迷い、生還した人々が、書いた物は、日常の生活からは遠く隔てられた経験ながら、私達に勇気を与えてくれ、明日への希望を繋ぐ精神のオアシスとして、深く心に刻まれる。

まず紹介する本は、Ｊ・シンプソン著『死のクレパスーアンデス氷壁の遭難』である。ペルー・アンデスのシウラ・グランデ西壁における遭難が書かれている。登頂後の下降の際に右足を骨折し、吹雪の中のアプザイレン中に宙ずりになってザイルを切断、クレパスに落ちる。彼は、死んだと思わざるを得ない状況で、パートナーは、Ｂ・Ｃへ一人戻る。そして、奇跡的に生き延びていた著者は、精神と肉体の限界とも思える苦闘の末に、仲間のもとへと、生還する。

読者を、圧倒する程に、死の極限にまで追い込まれた著者の心理状態、恐怖、死の淵から生還するまでの人間の、いや命という物の力強さ、それらが、奇麗事ばかりではなく、これでもか、これでもかと、目前に晒け出されて行く。読み始めた途端、一気に話しに引きずり込まれ、読了後は、まるで映画でも見ていた様な気持ちにさせられる。

次に紹介する本は、佐野三治‥著『たった一人の生還ー「たか号」漂流…二十七日間の闘い』である。記憶にまだ新しい１９９１年の年末から１９９２年１月末まで、１ヶ月近くも漂流し続け、生還した方の手記である。捜索の飛行機を見つけた事による希望が、実は、発見されていなかったのでは無いかという疑惑、そして絶望、次々と友が、目の前で旅立って行き、最後に残された一人が、今度は、自分の番だと遺書を書き、もう駄目だと観念した日に、奇跡的に助けられる。あらすじ‥として書けば簡単だが、現代社会では、経験する機会の有り得ないであろう本当の意味での生きるための闘いとは、余りにも過酷である。また一人だけ生還したことによって、社会に戻ってからの闘いの方が、著者にとっては苦しかったのではないだろうか。『心の漂流』から救われ癒されていく過程は、読者にとっても感動的である。

三冊目は、吉村昭‥著『漂流』である。‥江戸・天明年間、シケに遭って黒潮に

乗ってしまった男達は、無気味な沈黙をたもつ絶海の火山島に漂着した。
水も湧かず，生活の手段とてない無人の島で、仲間の男達は、次々と倒れて行ったが、土佐の船乗り、長平は、だだ一人生き残って１２年に及ぶ苦闘の末、ついに生還する。］という…あらすじである。これから読む人の為に、どうやって島から脱出したのかは、書かないが、この話も実話を、元ににした小説である。
水もなく、草木も生えておらず、何の道具も無い、無人島で、生への望みを絶やす事無く生き続け、望郷の思いに支えられて見事に生還する彼らは、ぬるま湯の様な生活に浸っている私とは、何という違いであろうか。

つまり、これらの生還者の体験記、及び小説は、根源的な生命への感謝……
『生きる』と言う事に対する、力強い賛辞に溢れており、それが私達の心を揺さぶるのであろう。明日の夜明けが、来るまでの永遠とも思える様な、時の繰り返しの中で、絶望に陥りながらも、死の淵に飲み込まれる事なく、もう一歩、もう一歩の長い道程を歩み、追い続けた人々の勇気を、我々は賛え、そして自分の道標とするのである。

（村上晴美　記）

目　次

1993年 秋号 １０月～１２月 第１１号　ACC-J茨城

『生還』…生と死の狭間で…　・・・　1
集会報告　・・・　4
山行報告　・・・　5
東丹沢キュウハ沢～四町四反の沢　・・・　6
角落山　・・・　9
ウメコバ沢中央岩峰【恵子ちゃんルート】　・・・１１
御坂山塊十二ケ岳、桑留尾川行者帰り沢　・・・１６
両神山（赤岩尾根）　・・・１９
熟年パワーに圧倒された一日　・・・２２
目標『白毛門』千回　・・・２６
ジョウゴ沢氷登り　・・・２７
友好山岳団体の月報、会報紹介　・・・２９
編集後記　・・・３０

集会報告

（於、スカイラーク土浦真鍋店）

１０月１３日

出席者　菊地、高田、佐藤、村上、本図、生井

１０月２７日

出席者　生井、菊地、古山、村上、高田、本図、笹沢、馬渕、古山

１１月１０日

出席者 本図、高田、古山、村上、生井、菊地、鯉河、笹沢、

１１月２４日

出席者　本図、高田、生井、菊地、庄司、村上

１２月　８日

出席者　本図、高田、鈴木、鯉河、佐藤、菊地、笹沢、中居、古山、村上、生井

１２月２１日

出席者　本図、高田、村上、鯉河、古山、菊地、馬渕

山行報告

１０月　３日	キュウハ沢～四町四反の沢	Ｌ本図、古山
１０月１０日	角落山	Ｌ本図、生井、村上、笹沢、長久保
１０月２４日	ウメコバ沢中央岩峰 ケイコチャンルート	Ｌ本図、生井
１０月３１日	桑留尾川 行者帰沢～十二ヶ岳	Ｌ本図、生井、古山
１１月　３日	ウメコバ沢中央岩峰 スーパーフレークルート	Ｌ本図、生井、古山、佐藤
１１月　７日	古賀志山（岩トレ）	Ｌ本図、生井、古山、佐藤、笹沢
１１月１４日	古河人工壁	Ｌ本図、生井、古山、佐藤
１１月２８日	赤岩尾根（両神山）	Ｌ本図、生井、古山
１２月　５日	古賀志山（岩トレ）	Ｌ本図、佐藤、庄司、他１名
１２月11～12日	天狗尾根（八ヶ岳）	Ｌ古山、中居、庄司
１２月１２日	烏帽子岳（西上州）	Ｌ本図、笹沢
１２月１９日	白毛門　（谷川岳）	Ｌ高田、佐藤、古山、庄司
１２月２３日	ジョウゴ沢（氷登り）	Ｌ本図、生井、佐藤、古山

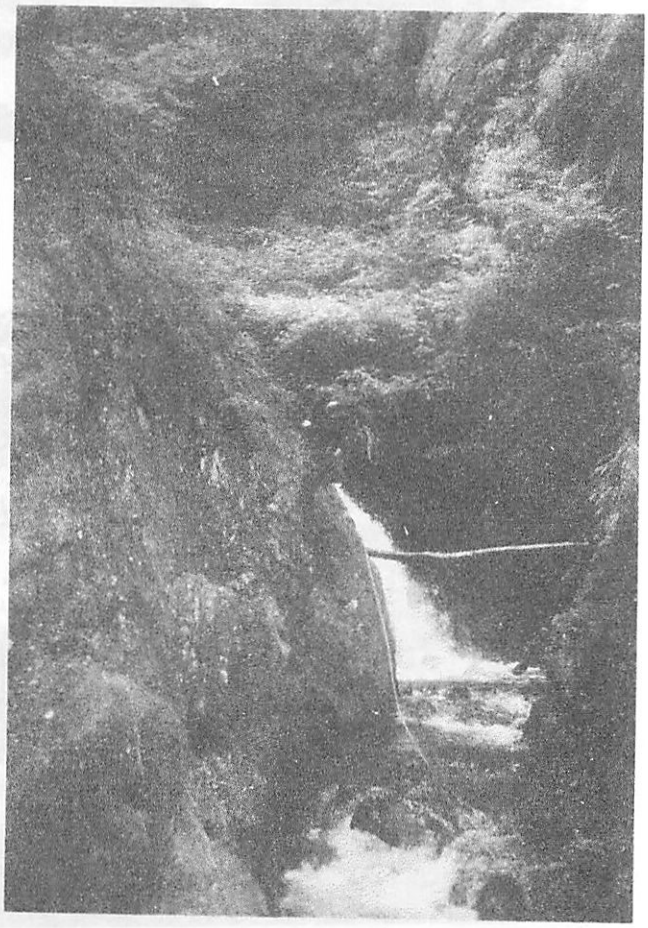
東丹沢キュウハ沢～四町四反の沢

１９９３．１０．３
パーティ　Ｌ　本図一統、古山正文

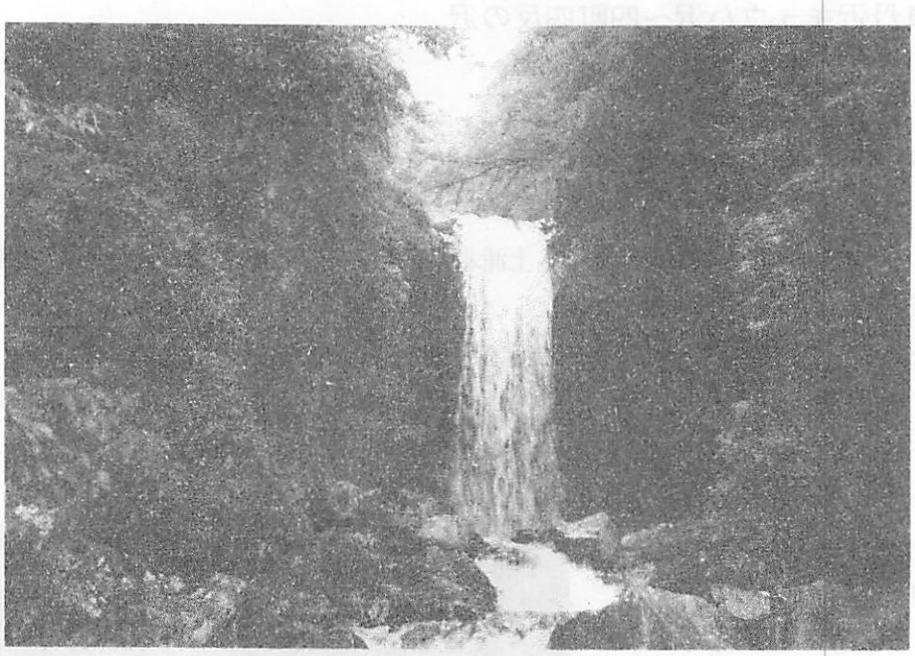
千代田町役場の駐車場に集合、土浦北インターから高速に乗り、中央道の相模湖東で降りた。そして宮ヶ瀬を通って、本谷川林道を進み、出合へ向かう。出合の広場ではすでに焚火を囲んで宴会を開いているグループがいた。

朝食後、すぐに入渓。始めはゴーロ帯の堰堤越えを繰り返す。程無く、小さなゴルジュに着く，ここは左から登りトラバース気味に通過。次の滝を左から登るとキュウハの大滝１０ｍに着く。左からは四町四反の沢が、入ってきている。

キュウハの大滝は、左から高巻く。この後、沢に戻り顕著な、数メートルの滝の二つを、それぞれ滝の流れの左から越えると、広いゴーロ帯となり、左から入るガレ沢に入り、崩れそうな脆い本流をつめると、丹沢山頂上に向かう獣道に出て、数分で山頂に到着した。山頂で小休止し、下りは、『茸をとりながら行くっぺよ』『そうですね！』と言う話しをしていたら、ちょうど茸採りから帰って来た小屋の管理人さんから採れたての



キュウハ沢を下降する古山



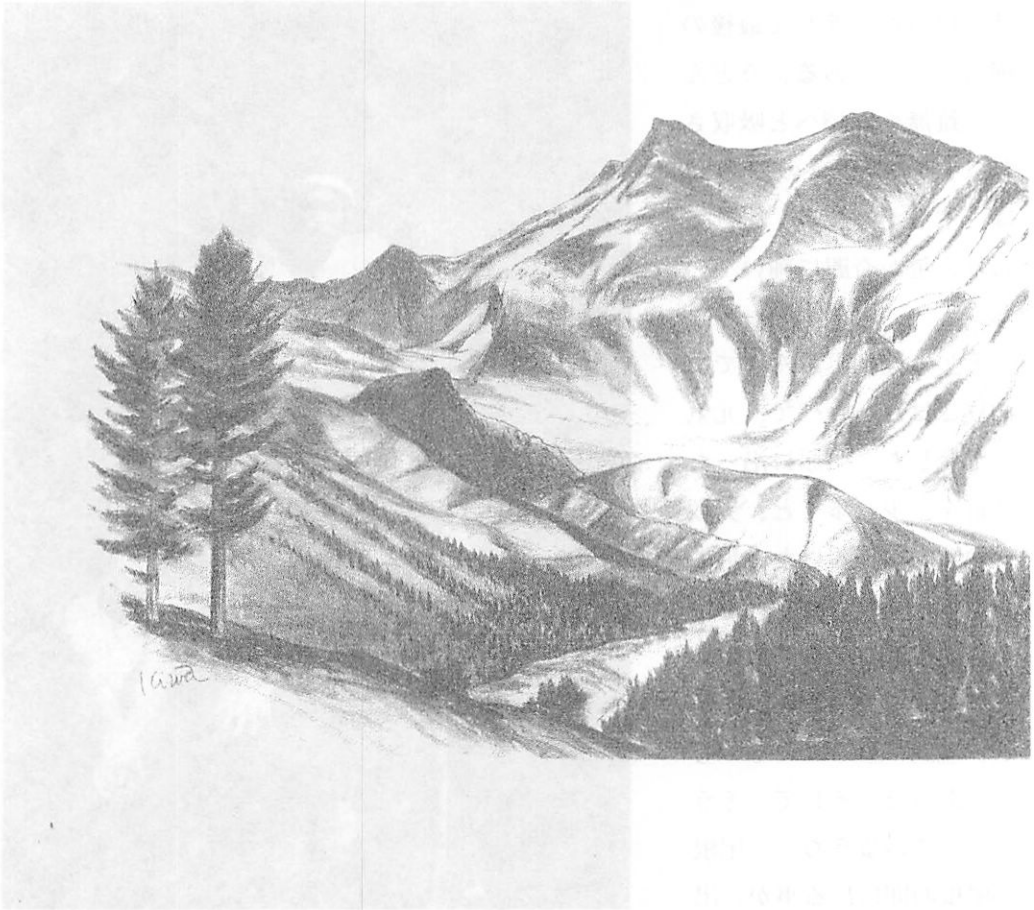
キュウハ沢の大滝

丹沢山頂にて

茸を、一袋も分けてもらい、非常にラッキーでした。

下りは、塔の岳へ向かい尾根筋を、二つぐらい越えた辺りから四町四反の沢の下降に入る。この沢は途中、一ヶ所だけ高巻き下り、程無く、キュウハの大滝の下に着く。朝、登ってきたゴルジュの入り口の所で、ザイルを出して懸垂下降し車に戻る。帰りは、厚木経由で都内を通って帰るが、案外、速く都内を、通過出来そうなので、水島さんの所によって『挨拶していくか！』と言う事で水島宅により、お茶を御馳走になる。水島さんも一人で丹沢に行っていると言う事で、渓流たびがベランダに干してあった。

（古山　記）



角落山

１９９３．１０．１０～１１
パーティ　Ｌ　本図一統、生井一男、村上晴美、笹沢ひろみ、長久保加寿子

１０月１０日、体育の日の午後過ぎに、集合場所である下館市役所を出発し、途中、酒屋に寄って、夜の酒盛り用の酒を買い込み、その後、一路角落山を目指した。

現地に、到着したのは、日も暮れかかった頃であり、早々にテントを張り、夕食の準備に取り掛かった。今夜のメニューはす・き・や・き。大量のお肉に、野菜に、しらたき、豆腐等を、順番に煮込み、そして、ビールだの、ワインだの、お酒だのと、一緒に次から次へと、平らげていった。そして最後の締めくくりである、うどんも、難無く胃袋へと吸収されていった。そのころには、すっかり夜も、更けており、星が奇麗に輝いていた。

そして翌朝、みんなで、納豆ごはんを食べて、元気に出発した。川原に沿った林道を、少し歩くと、男坂への登山口に着いた。男坂へのルートに入り、沢沿いの目印に沿って行く途中、きのこなどを採集しながら、順調に登っているつもりであった。そして、そうこうしているうちに、尾根と尾根の間に出る事が、出来た。そして、頂上へ……

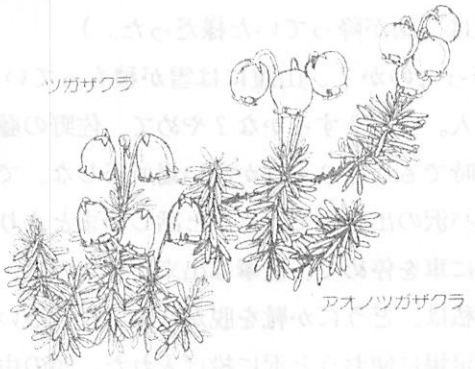
角落山　山頂にて

……。『おや？…何かが違う？』…表示板を見てみると［剣の峰］と書いてあるではないか。まあ！取り合えず、ここで、昼食を取ろうではないかと言う事になり、本図さんが作ってくれた、暖かいおしるこを御馳走になった。エネルギーの補充もし、『さあ、下山だ！』と思っていた私であったが『せっかく、ここまで来たのだから、角落山に行かなくちゃ。』と言う何処からか知れない声が……私が、気を取り直す頃には、もうすでに、みんなは、登り始めていた。

下山は、スムーズに女坂を降り、無事到着。

帰途では、伊香保温泉で露天風呂に入り、（とてもいいフロ、でしたヨ。）名物の、おっきりこみを食べ、盛りだくさんの山行は、終了しました。

（キャシィー・長久保　記）



ウメコバ沢中央岩峰
【恵子ちゃんルート】

１９９３．１０．２４
パーティＬ　本図一統、生井一男

『私は決して｀スケベ´では無い。天地神明に誓って、そうでは無〜い！』声を高らかに言いたい！唯、単に→恵子ちゃんと言う名のネーミングに興味を持った、唯それだけだす。元来、好奇心＆探求心が旺盛な私は、ハテナ？何故何だろう？どうして？どうなるの？私達そして、どうするの〜？私達そこで、何するの？（コラコラ！歌ってどうすんだよ、歌って。）

そうです。私達は、そこで○○○するんです。ハイ二人でします。誰にも邪魔できません。ソウデス！登攀をウッフ〜ン　…ト・ハ・ンするの！

本図仙人と二人きりで、…ルンルン　…てな誤解を招く冗談はさておき、私達は恵子ちゃんに会うため、一路足尾銅山を（ウメコバ沢）目指し、スーパーデリカをかっ飛ばしました。そして、いつもの駐車場に車を停めまして、明日会える恵子ちゃんの夢でも見ようと、シュラフに入り就寝。多分夢多き本図さんは、楽しい夢を見たでしょう。（この夜は、雨が降っていた様だった。）

翌朝は、雪が降ったのか？、山腹には雪が積もっていました。外のその光景を見て、見詰め合う二人。『どうすっかな？やめて、佐野の藤坂ロックガーデンでも行ってみっか？こんな時でもなけりゃ行かない場所だしな。でもなァ』等とあれこれ迷ったあげく、ウマコバ沢の出合まで行くかと話しがまとまり、車を走らせました。ウメコバ沢の出合の所に車を停めて、登攀は出来そうなので、身支度を整え、徒渉しやすい場所を探す…。私は、どうにか靴を脱がないで行けないかな？とアレコレと考えた末に、大きな石を足場に使おうと沢に投げ入れた。頭の中では、猿飛佐助の様に宙を舞い、かろやかに渡っていく姿が浮かんでいたんだけど、現実は非常にきびし〜い！

石をつたって行こうと２〜３足行った所で、足場の石（自分で投げ入れた石）が崩れて、両足とも『ドッボ〜ン』とツッペッテしまった。ふと見ると本図さんは、靴を脱いで渡っていくではないですか。それもこんな私の姿を見て、笑っているじゃ、あ〜りませんか？！

『くやしい！いっちゃんのバカ、バカ、バカ！』と自分の考えの甘さに鞭うち、岸

に戻って靴を脱ぎ、そして本図さんの後を追うように沢を渡りました。後は、本図仙人の後を付かず離れずついて行き、『恵子ちゃん』ルートの取り付きに着きました。

天気の方は、雪が舞ってきてとても寒い。寒くて仕方ないので、しばらく日向に退避して体を暖める。寒さで、とても登攀する気力は起きない。

壁に日が差すまで待ってみる。…１０時頃だったかな？壁に日が差してきた。取り付きに戻り、登攀の準備をする。『本つぁん！アブミは、要らないっすか？』『ここは、要らなかっぺ、要らねィ～から置いていくっぺ』てな事で置いて行くが、これが後で致命的な結果を招くとは？神のみぞ知る！

まずは、私めがトップをいきます。恵子ちゃんルート、１ピッチ目は、○○○○を登る。いわゆる○○○○だ。最初は指が入る位の○○○○で、それが体が半分入る位の○○○○に変わる。かっなりキッツ～イ。でも楽しい登り。＝嬉し、はずかし、朝帰り！と言う楽しさでした。そこで、何で恵子ちゃんと言うネーミングなのか？由来が『ハハ～ン、ナルホド』と分かりました。貴方も一度来て、自分の目で、体で、感じてください。きっと由来が分かるでしょう。

その恵子ちゃんを落とすには、○○○○のテクニックをものにしていないと駄目です。何故なら、途中で人間チョクストーンになって、抜けなくなってしまうからです。始めての方は、十分に経験を積まなければ行けませんので、注意の事！　私も途中で、人間チョクストーンになりかかり、手足を抜くのに苦労しました。でも、ケイコチャンの○○○○は、ジャミングが思ったより利いてタノシイ、楽しい、すぅんごく楽しい登りでした。本つぁんも楽しそうに登っていました。ヤッパ仙人は、経験豊富。ヒュー！　ヒュー！

そして、問題の２ピッチ目。最初は凹角状になっていて、出口の所が被っている。抜けには、アブミが無いとチョットたいへんかな？　でも…『人に登れて俺に登れない事なかっぺ』と常々言ってる私としては、いかなる状況にあってもそれを登らなければいけない宿命にあ～る。

まぁ！最初は、チョチョイと凹角の出口までフリーで行ったんだけんどが、出口の所には適当なホールド、スタンスが無い。どうすっぺ？と少し悩んだが、臨機応変な私は、すかさず左の壁のハーケンにシュリンゲを通し、それをアブミの代わりにし、左足を掛けて、右足はスメヤリング。そして、出口の微妙なホールドに手をかけ、強引に体を引き上げようとした。引き上げながら、下でビレーしている本つぁんに『もしかしたら？落ちるかもしれませんよぅ』と声をかけると、『そりゃ？困るなあ！頑

張って行ってくれヨッ！』と声が帰ってきた。『じゃ、頑張って行くか』と思いつつ、体を引き上げる。『ウッ〜ン！もう少し、も〜う少し、モウ〜チョット上〜！』と少しづつ体が上っていく。イックゥー！イッター？と感じた瞬間、シュリンゲにかけた足がクルリと反転！　確保していた本つぁんの所まで落っこちてしまった。

『イテテ!?人指し指の皮がむけちった』と本っぁん…。どうやらザイルが擦れてむけたらしい。『大丈夫ですか？痛いですか？』…と手を見ると、確かに少しむけている。モウシワケナイ！と心で詫びました。

『こんなわけは無い！俺に登れないはずが無い！絶対に無い！このコマンタレ・ブウー』と再度チャレンジ…。今度は、右足と左足両方にシュリンゲを付け足場にするが、これがまたバランスを取るのが難しい。被っているので、足が振られて態勢を保てない。そんな状況でも、ダマシ、ダマシ体を上げて出口の上のワレメに手を入れるが、イマイチきいていない。ドナイショ？　ズリズリと微妙に態勢を上げて行くが、またも足のバランスが崩れた。『ウゥー』と、今度は仰向けに落ちてしまった。今度のは致命傷だ。右足のシュリンゲは落ちると同時に外れたのだが、左足のシュリンゲが絡まり、凹角に逆さ釣りの張り付け状態になった。一瞬、この状況から抜けられないんじゃないかな？　このままずぅ〜と…との考えが頭を過ぎったが、私は決してめげない！　私は、強い子、良い子、猿島の子！　逆さまの姿勢で、左足をズリズリとシュリンゲから外し、そして壁を蹴り体を、1/2回転ひねりムーンサルト！　無事着地。（9,90の高得点だ!）

『畜生！』三度目のトライ！　こうなるともう意地である。ここで私はプライドを捨てた。出口のワレメに、ナッツをかませる事にする。『ウウン？これは利いた！』

ナッツを支点に体を持ち上げる。『ウン〜ン？これは行けるかイッタァー』と思った。次の瞬間また悪魔が悪戯した。全体重が掛かっているはずのナッツが外れた。『何故、なぜだ！』と叫びながら、私は落ちていった。　もう体中の気がオーラが、ブゥオー！と沸き上がる。『ウォゥー！』体の血が、フツフツと沸騰してくる。この時は、もう落ちる事への怖さ何てものは、ミジンも感じない。それより何か？こう燃えるものを感じる！そう！『巨人の星』の星飛馬が見せた、あのライバルとの戦い。アノ目が、燃える闘魂。それが今、体中に感じ、駆け巡っている。

今度こそは、と煮えたぎる血潮を抑えながらトライする。また出口の所でシュリンゲに足に掛け、少し考えこんでいると、下から本つぁんが『オ〜イ！右のシュリンゲと、左のハーケンの間のハーケン！　そこのハーケンの下のやつソレそれ、使えねぇ

のかよ。それ違うのか？　じゃハーケンを打てっけよ』との声…。

しかし、私はかなり血潮が煮えたぎっていたのか、そのハーケンが分からず、困惑してしまった。仕方なく、さっきナッツをかませたワレメにどうにかハーケンを打って、それを支点にＡ０で強引にはい上がる事にした。今度はどうにか越せた。成功だ。ここを越せば後は４級の登攀になる。まず、７ｍ直上、そして５～６ｍ左上し、その上をまた直上し『丘を越え～行こうよ！大ぼら吹きつ～ッ』と鼻歌を歌いながら、ビレー点に到着。

『ビレー解除！登ってきて良いですよぅ！』とコールを大声で叫ぶ。すると本つぁんは、恐っろしい早さで登って来るでは無いか？。この俺が、３回も落ちた所ですよ！　何でも、さっき本図仙人がアドバイスしていたハーケンを使って、楽々登ったとの事でした。でも私は本当の事を知っている。多分本図仙人は、先の仙人より受け継ついだあのいにしえの聖仙７呪文の内の一つ、飛翔の呪文を使ったのだろう。そう、あの呪文…『リーテ・ラトバリタ・ウルス・アロアロス・バル・ネトリール』。我を助けよ！光りよ！蘇れ！ってネ。あれを使ったんだろう？ソウダ！そうに違いない！（あっと、これは秘密だった。）読者の皆さん、この事はヒミツですよ！くれぐ

胸を張る生井（取り付きにて）

れも他言無用！いいですネ！

『おっと、話しが、ちょっと脱線しましたネ。元に戻しましょう。』　そして3ピッチ目は3級という事で、そのまま本図さんがトップで行きました。少しして、『オォーィ！いいぞゥ！』とコールがあり、ザイルに引かれるままに終了点に着きました。そして下降点までテクテク歩いて、下降点到着。＝早速、懸垂下降工作。これはいつもの様に、仙人様が行いました。私はと言いますと、その傍らでまるで《子ずれ狼》の大五郎の様に、チョコンと座って待っていましたです。ハイ。

そして、すぅーとケンスゥーイ下降して沢底に到着。後は歩いて取り付きまで戻りました。　当初の予定では、スーパーブレークもやっつけようと言う事だったんだけど、天気も悪くなって来ているので、恵子ちゃんに『ありがとう！また機会が、あったらまた会おうネ！』と別れを告げて、出合で待っているスーパーデリカの元に戻った。そして、かろやかに帰途についたのであった。

ＰＳ…ここで、読者のみなさんに問題です！　文中の○○○○には、何と言う文字が入るでしょうか？　読者のみなさんは賢いからすぐわかるでしょう？　それでは、また機会がありましたら…ｓｅｅ，ｙｏｕ、ａｇａｉｎ…

（生井　記）

コメバツガザクラ

御坂山塊十二ケ岳、桑留尾川行者帰り沢

１９９３．１０．３１
パーティ　Ｌ 本図一統、生井一男、古山正文

『そんなことは絶対ありえない』『だったら俺たちに分かるように説明しろよ』私、生井、古山の３人は大激論を交わしていた。所は西湖の湖畔、シーズンオフの閑散とした桑留尾のキャンプ場の片隅に止めたデリカの中である。激論の内容は“超能力”は存在するのかしないのかという山とは全然関係のない話である。古山は完全な否定派、生井は肯定派、私は基本的には否定派であるが、もしかするとあるかもしれないという中間派である。ミスターマリックをはじめとした何人かの超魔術師とか超能力者とかいう人達のやっている手品？芸？技術？占い？演技？いんちき？・・・のことである。３人ともテレビで見たことがあるだけで、自分の目で見たことはない。

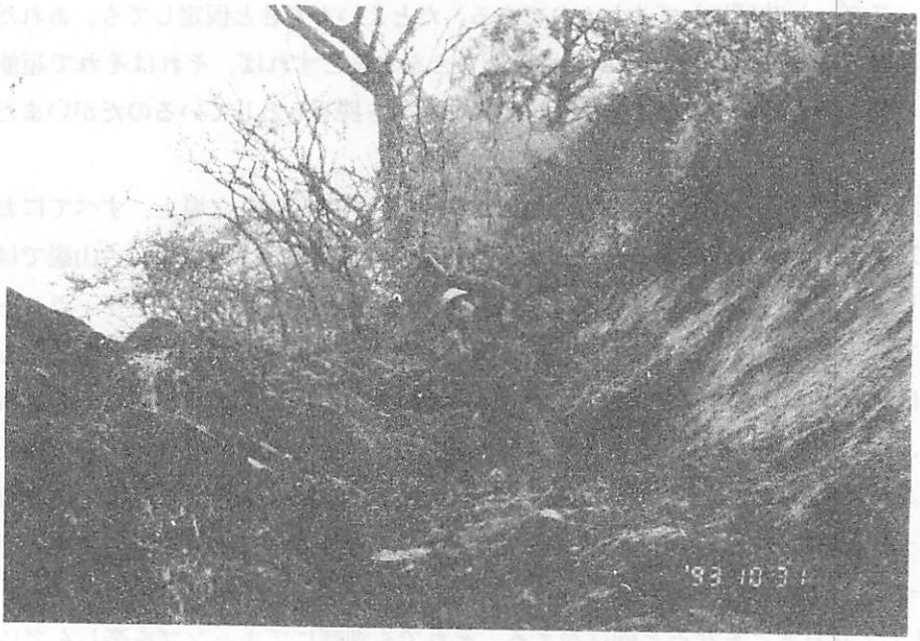
生井は私のマインドコントロールにも、すぐかかってしまうという立派な頭の持ち主なので、心の底から信用している。自分がパチンコに強いのも超能力のせいだなんて思っているかもしれない。

私も頭は結構おめでたいほうであるが、信用してはいない。といっても不思議である。スプーン曲げにしてもしかりである。たとえいんちきと仮定しても、あれだけの面前でだれにもわからないようにいんちきをするとすれば、それはそれで超能力といってよいくらいの技術である。一生懸命タネを探そうとしているのだがいまだにわからない。

それらに比べ、古山は超伝導を研究している科学者という立場上、すべてにおいて否定する。しかし否定するだけで我々の納得いく説明は一つもない。古山説では“テレビでやっていることは、本人は勿論、スタッフもゲストの科学者もギャラリーもすべてグルでいんちきしてるんだ。”これだけである。はたして当っているだろうか。私はそうは思わない。たくさんの番組の中にはそういったものもあったかもしれないが、現在に至っても、ＮＨＫまで全国の視聴者をあざむく番組を作っているのだろうか。私はそこまで疑りたくはない。この古山博士の説には納得いかず文頭の激論になった訳なのである。この件については５年１０年をかけてお互い納得いくまで論じ合っていかなければなるまい。

さて１０月末ともなると朝は冷える。それでも湖畔にてキャンプを楽しんでいる人

達が結構いる。そのキャンプ場のきれいなトイレを利用させてもらい、寝不足の目をこすりながらザックを背にする。新しい堰堤造成中の所を過ぎ、ケルンを探しながら行くも見当たらず行き過ぎてしまう。少し戻り出合に立ってみると想像していたよりしょんべん沢でガッカリする。我々山屋は、あれのことをキジ、おならのことを空キジ、おしっこのことを小キジという。この沢は水もなく空キジ沢と言ったほうがよい。でも少し登ったらネズミのしょんべん沢になった。２０ｍナメは縄を出して登るほどの価値もなく左から巻く。その上の２０ｍ大滝は登ることにする。生井が縄をつけ左手より取付く。岩釘を１本打ち直上し、落口は右手からぬける。私は落口は左から登った。この滝を登ると渓相がガラっと変りルンゼ状を呈し、その中に滝を連続して懸けている。技術的には容易で縄無しで登って行くと、２０ｍ２段の落口がちょっと悪く感じたので、後ろから来る生井に縄を付けたほうが良い旨伝える。これを過ぎるとゴーロになった。私は２人より５０ｍ位先を歩いていたろうか。右手でちょっと触れた石が動き始めた。それはとても大きな石で直径６０ｃｍはあろうかと思われた。ゆっくりゴロゴロと転がっていく。私は黙って見ていた。すぐに止まると思っていたからである。しかしその石は球状をしているためか、だんだん加速しはじめた。



２０ｍ２段の滝を登る本図

全身から血の気が引いていくのを感じた。私の所からは見えないが２人は今、滝を攀じているところだ。「ラーク、でかいぞー、逃げろ、ラーク、ラーク」もー大声なんてものじゃない。悲鳴だ。“頼むから逃げてくれ、頼むから当らないでくれ”祈る気持ちだった。加速した大石はいくつかに割れやがて視界から消えていった。“ガラガラドッシーン”しばらく立ちすくんだまま声がでなかった。恐る恐る「だいじょうぶかー」と呼んでみると「だいじょうぶー」。「２人ともなんともないかー」「なんともないよー」。極度の緊張から解放された私はそこにへたり込んでしまった。ルンゼ登攀の時の鉄則を守っていなかったばっかりに余計な心配をしてしまった。反省しなければ。でも何事もなく良かった、良かった。今までこんなラクをしたのは１回だけだ。忘れもしない１９６８年６月９日、一ノ倉沢衝立岩正面を登っていてスタンスが崩れ、等身大の岩が大音響と共に落下していった。その時、私はしっかりしたホールドを掴んでいたので落ちなかったが、テールリッジを登っている人に当たらなかったかと、心配でしばらく下を見ていたことがあった。それ以来だ。気を取り直し慎重につめて行く。山頂近くなるとゴミがやたら目につき大変不愉快だった。頂上には３人の登山者がいて怪訝な顔付で迎えられた。天気が良くて富士山が正面に見え、大変気持ち良いのだが、風が強いので体の濡れている我々にはちょっと寒い。急いで昼食をとって下ろう。計画ではここから毛無山に行き、長浜経由桑留尾であったが、昨夜十二ケ岳から直接桑留尾に下りる道があることを確認しておいたのでそれを下ろう。下り口は頂上の肩で、富士山と西湖を眺めながらの下りは楽しい。途中“アカモミタケ”の群生を見つけ今晩のミソ汁の具を確保した。３０本位採れた。このような楽しみも秋山ならではのものである。

帰りは東京の山道具店に寄り、氷壁用のつるはしや氷釘などを買い込んでいこう。

桑留尾（8:00）－行者帰り沢出合(9:40)－山頂(12:15～12:30)－桑留尾(13:40)

（本図 記）

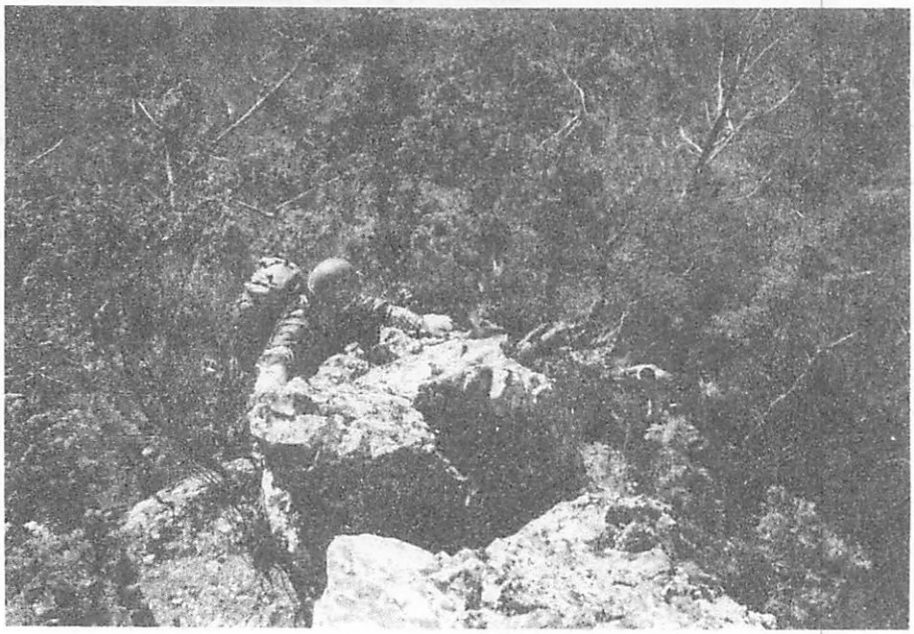
両神山（赤岩尾根）

１９９３．１１．２８

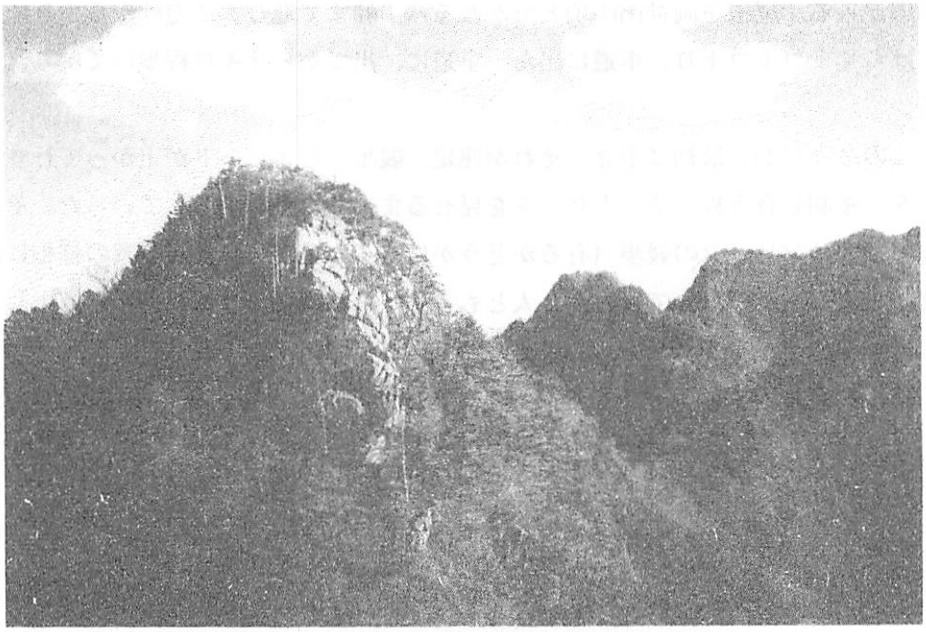
パーティ　Ｌ　本図一統、生井一男、古山正文

熊谷、秩父、志賀坂トンネルを越え、金山の鉱山に着いた。ここの鉱山は、公民館とか、保育園とか、鉱山で働いていた人達の住居の後（団地社宅の様な物）があり、昔はかなり栄えていたであろう事が伺えた。（時代の流れを感じる）

我々が、これから登る赤岩尾根は、ここ金山から、西に見える山群をぐるっと回って帰って来る事になる。鉱山事務所から森林伐採後を通ってコルに向かって登る。近くで狩猟が行われているらしく、猟銃を発砲する音が頻繁に聞こえ、気持ちが悪い。コルからすぐの岩峰を、ザイルを出して生井さん、本図さん、古山の順に直登する。一般道は、この岩峰を左に回り込むようだ。ほぼ２ピッチで岩峰上に着く。これからは、尾根歩きになるが、所々に岩場が現れ、その度に『ちっとも難しくなかっぺ、ン～モットまっすぐ上がってこうぉ！』…と難しい所を登る様にとの本図さんの教育的



岩稜を登る古山



赤岩尾根Ｐ１をのぞむ

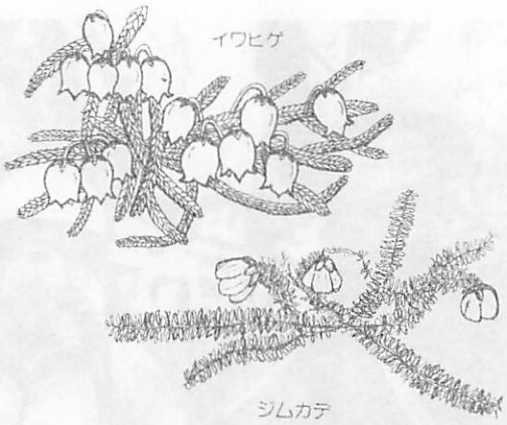
赤岩山頂上にて

指導が入る。尾根を両神山山頂と分かれる八丁峠まで進む。この峠から下りに入る。しばらくトコトコ下り、車道に出た。車道に、出てから２キロ程歩いて戻り、車に到着。

この２キロが、最初は歩き、それが速足、競歩、とスピードが上がって行き、お互いを、牽制し合う程、デットヒートを見せるまでエスカレートしていった。それは、まるでオリンピックの競歩（有るかどうかは知らないが？）の決勝戦の様相になり、そのままゴール（車まで）に、３人とも青息吐息状態で、なだれ込んだ。果して一番にゴールのテープを切ったのは、誰でしょうか？……

そんな楽しい、競歩登山を無事完走し、また来ることを、誓い帰途についた。

（古山　記）



熟年パワーに圧倒された一日
（西上州烏帽子岳北西稜）

１９９３．１２．１２

パーティＬ　本図一統、笹沢ひろみ

１８歳の夏、私は単独で谷川連峰全山縦走を目指し、上野から夜行列車に乗った。列車が混んでいたので私はデッキに腰をおろした。やがて列車は高崎に着いた。そこから４０歳位の男性が乗り込み私の脇に座った。土合に着くまでその人と山の話をした。話をしたといっても私は初心者なので、もっぱら聞き役専門だったが、その人はいろいろな話をしてくれた。高校の教師をしていること。３０歳過ぎてから山登りを始めたこと。なぜもっと早く登山を始めなかったかと後悔していること。山登りがしたくて山岳部のある高崎の高校に転勤願いを出したこと。今高崎に住んでいること。今日は山岳部の夏山合宿で来たこと、などなどである。この先生とは谷川岳の山頂付近で又逢い、統談があるのだが、この先の話は省略する。ただ、この先生の話の中で、妙義山は素晴らしい山で毎週行っているという話に非常に興味を持った。当時単独で丹沢の沢を登っていた私は全山岩山という

ブッシュの中からＶサインの笹沢

話に引かれ、同年秋には友人と二人で、麻ザイル１２ミリ３０メートルという、今ならば博物館行きのような代物を持って、表妙義縦走に出かけたのだった。これがその後、私を妙義、西上州に足繁く通わせることになったきっかけである。しかし足繁くといっても、クラブに入り、だんだん岩登り中心の山行になっていった私には、この岩山と薮山の中間のような山塊にばかり行くことはなく、足は自然と谷川岳に向いていった。おかげで、今でも登っていないルートがあるということは、考えようによっては嬉しいことでもある。今日はその中の一つ、烏帽子岳北西稜である。

昨日この辺は雪だったようで、車を止めてある御荷鉾スーパー林道は所々凍っている。でも今日の天気は最高だ。シボッ沢出合からはブルースカイをバックに三ツ岩岳がよく見える。烏帽子岳への指導標がポツンと寂しく立っている。鳥のさえずりが聞こえる以外は何の音もしない。我々以外誰もいない。いかにも西上州らしい風景である。今日の烏帽子岳は貸切りかな？早朝はさすがに寒く、出発するまでなんとなく億劫だが、目が覚めてから出発までの一連の準備を１時間位で済ます。新雪が道を隠そうとしているが２センチ位では隠しきれず、その上をサクサクと快い音をたてながら進んでいく。地図で確認して北西稜の末端と思われる尾根に取付く。ルートが道から外れると、急登になり足場も悪く足元が崩れて登りにくい。いまこうして笹沢さんの歩き方を見ていると、以前よりは足元がだいぶしっかりしてきた。前は見ているだけで心臓に悪いほど足元がおぼつかなかった。ブッシュを掴んでの急登やちょっとしたナイフエッジがでてきたがノーザイルでも心配なかった。そのうち８０度２５メートル位のブッシュ付岩稜に突きあたった。左から行けばブッシュ伝いに行けそうだが、ここを巻いてしまっては何のためにザイルを持ってきたのかわからない。ザイルをつけこれを直登する。難しくはないが高度感があり慎重に登る。傾斜が緩んだ所でピッチを切り、笹沢さんにトップを譲ると頂上は目の前だった。頂上は狭く、二人の荷物を広げたらいっぱいになってしまった。３６０度の展望は上越国境の山々や浅間山、北アルプスまでよく見える。寒くなく暑くなく気分は最高。時間もあるのでゆっくりしていこう。正直言って、私はこのくらいの行動では、ちょっと物足りない。何年も前、一日で日光の男体山と太郎山を登ったことがあるが、今日ももう一つ登りたいくらいの気力と体力は残っている、のだが・・・・。

写真撮影後、歓談していると下のほうから声が聞こえてくる。その声はだんだん近くなり、やがて数名の男女（爺さんと婆さん）が姿をあらわした。二言三言、言葉を交わすと後からまだ来るという。なんだか騒々しい雰囲気になってきたなと思った

ら、なんと４０人も登って来たのである。５～６人でいっぱいの頂上に４０人がいられるわけがない。頂は人間であふれてしまった。彼らを見ていると、爺さんより婆さんの方がはるかにパワフルだ。私より若そうな人もいるが偉いと思う。私などは、こんな爺さん婆さん達と群れをなして山行する気持ちなど微塵もない。そのうちあちこちで食事が始まった。私達は隅っこでネズミのように小さくなってコーヒーを飲んでいたが、なんか片身が狭くなってきた。ちょうど混んでいるときに、吉野屋の牛丼を食べ終わったら、すぐ店を出なければ申し訳ないような気持ちになるのと同じ心境だ。すっかり気分を害してしまった我々はこそこそと下山を始めた。『すみません、下りますので少し空けて下さい』と言いながら。後ろからパワフル婆ちゃんの声が聞こえてきた。『あの人達、どこから来たんだろう。雪の上に踏跡なかったし、きっと、ゆうべここに泊まったんだわ。ほら、鍋も持ってるでしょ』・・・・と。ばか言え、俺達、カモシカじゃねーやい。これは鍋じゃなくヘルメットっていうんだい、このドアホ。

頂上にて、笹沢

山頂から離れると、また静けさをとりもどしホッとした。ここで、爺婆軍団の落ちこぼれと行き会う。この人を一目見て落ちこぼれる理由がすぐわかる。
だって、はっきり言ってデブなんだもん。自分の腹がじゃまで足元が見えないんじゃないかなと思うほどのデブである。いまにも死にそうな息使いである。『もう少しだから頑張って下さい』と声をかけすれちがう。あーあ！どうせ集団が来るなら、せめ

てイケイケギャルだったら良かったんだけどなー！だったらおんぶに、抱っこに、肩車で、頂上まで連れて行ってやるのに！などと考えながら登山口までくると、爺婆軍団の一部が残っていて大きな鍋に豚汁だか、おでんだかを作っていた。『市民ハイクですか』と聞いてみると、クラブの山行だと言う。もしうちのクラブがあんな爺婆に占領されたら、私は迷わず、すぐ退会届を出す。

車(9:00)－烏帽子岳(10:55～11:30)－二俣(11:45)－車(12:30)

（本図 記）

目標『白毛門』千回

１９９３．１２．１９

パーティ　Ｌ　高田暢年、古山正文、佐藤文則、庄司真陸

しばらく山から遠ざかってた私も正月合宿に参加することになり、それに備え少しでも山を歩いておこうと白毛門に行くことにする。去年も「ラッセル訓練」と称して何人か登っている。庄司は去年も登っているので今年で２回目である。なんでも白毛門千回を目指すとか目指さないとか・・・・。そんな事はさておいていつものように下館に集まり出発。本図さんと笹沢さんは苗場にスキーに行くとかで途中までつるんで行く。沼田あたりから雪がちらほら降りだし、水上あたりは完全に雪になっていた。土合駅の前に車を止め、駅の待合い室で一杯やって寝ることにする。思っていたより混んでいた。みんなどこに登るのだろうか、殆どが中高年の人であとは学生のサークルであった。

翌朝は７時頃起きるつもりだったが、回りの人の準備する音で早く目がさめてしまった。昨夜の雪もすっかりあがり快晴である。ザックの中はザイルも登攀具も入ってないので殆ど空である。久々の山行には嬉しい重さである。

先行パーティーのつけてくれたトレールをたどり登る。トレールがあるとはいえいきなりの樹林帯の急登はこたえる。これでも山に行けない分体力維持の為に家の回りをジョギングしているのだが、まさに実践に勝るものは無し！

やがて樹林帯が切れ視界が開ける。ピークがかなり近づいてきた、あともうひと踏ん張りである。時々風向きによって天神平スキー場の呼び出しアナウンスが聞こえる。谷川岳の一の倉沢も奇麗に見える。一見穏やかそうに見えるが、この時期入れば最後二度と帰ってこれそうにない、そんな雰囲気である。

やがて特にこれといった難所もなくピークに立つ。ピークでは雪上訓練をしている学生パーティや少し反対側に下った所にテントを張って山スキーをやっているパーティなどもいた。とても天気がよかったたので、お茶などを沸かし昼飯にする。庄司に「目標の千回まであと９９８回だな」などとからかいながらゆっくり昼飯を食べたり写真を撮ったりして、あとは登ってきたルートを一気に下る。　久々の山行であったが天気に恵まれ大変充実した一日であった。

（バズーカ・高田　記）

ジョウゴ沢氷登り

１９９３．１２．１９

パーティ　Ｌ　本図一統、生井一男、古山正文、佐藤文則

年末のそろそろ忙しくなる頃、我々一行は全く何時ものように八ヶ岳へと向かった。何時ものように土浦を出発して、すぐ事件は起こった。酒を置いてあると思ったコンビニに酒が無いのである、勘違いであった。

ぶつくさ言いながら（佐藤はいわれながら）高速に乗ろうと少し行った時、『有った！』の叫び声が上がった。何が有ったのかと思うと“酒屋”であった。流石は古山氏。見えるかどうかぎりぎりの酒の看板に敏感に反応したのだった。お陰で、無事酒を買い入れ安心してヤツを目指した。

ところが、それだけでは収まらなかった、なんと中央高速が、凍結で通行止めになったのである。道が判らず、須玉まで行き、国道を戻り、改めて２０号に出てやっとの思いで美濃戸に着いた。

前夜遅かった事や、行程が短い事もありゆっくり寝たあと起床、小屋の親父の指示で車を移動した後出発、赤岳鉱泉を目指す。途中休止は取らず、一気に赤岳鉱泉に行き、小屋の前で軽く休憩した硫黄岳への登山道を登る。

登り始めてすぐ、大体５分位の所で、ジョウゴ沢出合となり、沢に入る。沢に入るとまた直ぐにＦ１の登場となる。此処で身支度を整え、練習をする。各自５回位登り降りした後、上に行くとまた直ぐにＦ２となる。これをザイルを出して越え、落差の無い滝を登った後、傾斜の落ちた雪面を行く。右俣の大きな滝（２０ｍ）を見ながら緩傾斜地を暫く行き、右ルンゼに入る。此処が今回の最大のポイント大滝２５ｍである。

ヴァーティカルの達人古山氏が、トップで登る。チューブを打つのに苦労しながらも、無事上に抜け、コールが来る。セカンドで本図さんが登る。相変わらず何の苦も無く通過。次に佐藤が挑戦する。しかし登れない。そうこうするうちに腕力は無くなってしまい、断念する。ラストで、生井さんが登る。一度落ちたものの直ぐに乗っ越す。上に抜けたメンバーは。懸垂で基部に降り、下降を開始する。美濃戸で小屋に駐車料金を払い帰途に着いた。

コースタイム

土浦(22:00)－美濃戸着(2:00)－美濃戸発(8:00)－赤岳鉱泉(10:00)－

ジョウゴ沢Ｆ１(10:30)－最終の滝下降開始(15:30)－美濃戸着(17:00)

（佐藤　記）

《友好山岳団体の月報、会報紹介》

ありがとうございました

月　報

◎Rohman NO.102 1993.10 浦和浪漫山岳会
こういう山屋に僕はなりたい、高養のアイデアシリーズその1その2、会越滝沢川左俣左沢～蒲生川左俣、川内谷沢川本流～南大谷沢右俣、川内早出川十三沢～杉川柴倉沢、和賀山塊生保内川ほか

◎Rohman NO.103.1993.11 浦和浪漫山岳会
奥秩父入川真ノ沢～股ノ沢左俣、南会津男女川本流～男女川右俣、虎毛山田代沢～春川西ノ又沢～虎毛沢左俣～右俣、虎毛沢赤湯又沢～虎毛沢、保呂内川西ノ俣沢～春川東ノ又沢右岸尾根～春川本谷ほか

◎Rohman NO.104.1993.12 浦和浪漫山岳会
チーフリーダーをうけて、越後駒ヶ岳～小倉尾根(荷上げ)、越後駒ヶ岳マキグラツルネ(偵察)、河村画伯の山書彷徨、奥武蔵浦山川冠岩沢ほか

◎月報・ＺＡＣ NO.146 1993.10 グループ・ゼフィルス
谷川岳北面万太郎谷、上信越魚野川本流ほか

◎月報・ＺＡＣ NO.147 1993.11 グループ・ゼフィルス
後立山白馬岳～朝日岳、北アルプス立山周辺スキー初滑りほか

◎月報・ＺＡＣ NO.148 1993.12 グループ・ゼフィルス
上越苗場神楽峰山スキー、八幡平後生掛温泉～ブタ森～八幡平～陵雲荘(往復)ほか

◎わらじ NO.453 1993.12 わらじの仲間
若さんの"山登りの周辺の風景"、山或記"両神山金山沢右俣"、喜妙義並木沢での事故報告ほか

◎峻嶺 創刊号 1993.11 遡行クラブ神奈川
設立総会及び旗揚げ式の報告、丹沢神ノ川小洞沢、奥多摩滝上谷～カロー谷、飯豊玉川桧山沢カゴノ沢、会員紹介

会　報

◎年報１６わらじ 1992年度 B5 266P わらじの仲間
朝日連峰三面川岩井又川ガッコ沢、冬の御神楽岳山伏尾根、南アルプス雨畑川ギョウザ、越後駒ヶ岳水無川滝ノ沢、北ノ又川滝ハナ沢、奥多摩カロー川谷、奥秩父滝川古礼沢、南アルプス尾白川本谷、中央アルプス正沢川本谷、谷川連峰桧又谷本谷、ゼニイレ沢、巻機山五十沢本谷、栗駒山産女川、下田大川下ノ矢筈川～光来出東又沢、南アルプス北岳バットレスピラミッドフェース～４尾根、越後大源太山コブ尾根、会越鳥甲山カネグラ尾根、燧ヶ岳山スキー、北アルプス焼岳山スキー、顎城雨飾山山スキー、海谷烏帽子岳山スキー、台湾大麻里渓～包盛渓、ヒマラヤサラスワティ峰、ヌン峰ほか

◎むげん NO.6 B5 187P 山岳渓流釣り集団むげん
南会津舘岩川水系鱒沢川、奥只見黒又川ハマコ沢、丹沢玄倉川モチコシ沢～同角沢、丹波小常木谷、奥多摩川苔谷、下越女川、特集・渓での盗難について、キノコ憑になりそう、渓で出会った大馬鹿野郎達、渓でのこわい話、特報・アンケート・暴かれたエリート達の寝言、ちょっと立ち寄りたい店ほか

◎ザイルで結ぶ友と山 部報Ⅱ(創立40周年記念誌) B5 195P 茨城県庁山岳部
遠見から猿倉へ、日本のオートルートを滑る、朝日岳スキー行、ダルコット峰登頂、トリスル峰登頂、アコンカグア峰登頂、ヨーロッパアルプス、百番目の山、鋸岳登頂の風景、憧憬の山宮之浦岳、幽谷の山幌尻岳、平ガ岳シロウ沢遡行ほか
追悼集、その他

◎鯉ちゃん B5 23P 浦和浪漫山岳会
鯉淵裕文氏の追悼集。氏は平成5年5月春山合宿の帰り、出張先の水戸に向かうが、岩瀬町の50号線上で事故死してしまう。昭和63年1月入会後氏のすべての山行、遺稿、会員の追悼文などでまとめられている。
鯉淵氏のご冥福を心からお祈りいたします。合唱

◎遭難対策パンフレット B5 32P 浦和浪漫山岳会
遭難対策の意義と考え方。山行実施に直接関わる遭難対策。遭難対策・緊急体制に入るにあたっての会の対応、各会員・ＯＢの権利、義務。緊急時における遭難対策体制。遭難対策費用。難予防対策の一貫として、ほか。

さすが浦和浪漫、当会も、参考にさせていただきます。

※ 編集後記

編集の仕事を担当して、初めての“１１号”が、今ここに完成いたしました。いろいろと構想は、浮かんだが、それを形にするのは、ナカナカたいへんだ。産みの苦しみ言うやつですか？　何かを形にする事の大変さをしみじみと感じました。今思うと、前編集長の偉大さが、今ここに身を持って感じます。

これからは、前編集長に追いつき、それを越える編集者に成りたいと思います

（伊集院少尉）

図4

季報「R&V」第１１号　発行１９９３年　秋
発行者：鯉河仁志
発行所：ＡＣＣ－Ｊ茨城　　〒306-06　茨城県猿島郡猿島町逆井318
生井一男 方
編集者：伊集院　忍

※ 編集後記

編集の仕事を担当して、初めての『ＩＴ』が、今ここに完成いたしました。いろいろな様相は、皆のんだが、それを形にするのは、すべてあなたのハンドル。考えの苦しみ方はそれぞれ？　何かを形にする者の大変さをしみじみと感じました。今思えば、制編実質の構大さが、今ここにそれを持って感じます。

これからは、制編実質に取りつき、それを編集を編集者に成りたいと思います

（作業室の隅）

発行：ＪＲＶ　第１１号　発行１９９３年　秋

発行者：編部一志

発行所：ＡＣＣ－１文舎　　〒306-06　茨城県猿島郡総和町北利根

電話（０２８０）８８－２１２１

編集者：伊東哲　他